

[優秀賞]

佐々木 駿さんレビュー (潟上市)

書評対象図書

シッダールタ・ムカジー 著／田中 文 訳『病の皇帝「がん」に挑む』(早川書房)

これから病に臨む全ての人へ

良い本は、良い書き出しから始まる。何度読み返しても、深く心に響くような言葉から始まるものだ。しかし、この本は少々違う。表紙をめくれば数点の写真とその解説、そして献辞がまず目に入る。たったそれだけで、これから本が語ろうとしている歴史の重みに圧倒される。本文に入る以前に、これほどの存在感を示す本は稀だろう。

この本はがんの病理史であると同時に、がんと闘った人々の物語である。がんと向き合うのは、医師や研究者だけではない。患者はもとより、その友人や家族、政治家、社会活動家、スポーツ選手、俳優、作家……あらゆる年代のあらゆる職業の人々が、この闘いに参戦していく。

その闘いは、苦悩と絶望と敗北と死の歴史だ。のちに医術の神として称えられる古代エジプトの神官は、女性の乳房にできるしこりの病に為す術なく白旗を上げた。それから五千年近く経って、近代医療が外科的手法を武器に、この病に挑戦する。しかし乳房を切り取っても、がんは転移し再発してしまう。「女性の体を醜くしたくはなかった」そう願いながらも再発を防ぐ為、切除の範囲は、より深くより広がって行く。胸の奥の大胸筋、さらには鎖骨までも切除の対象となり、術後の患者の体は恐ろしいまでに変形していく。

だが後に分かったことだが、この背筋が凍るような攻撃的な医療は、がんの根治には殆ど意味がなかった。外科的手法ではなく、化学的な薬物療法も試された。しかし、一旦はがんを寛解させても、それをあざ笑うかのようにがんはあっさり舞い戻り、戦況をひっくり返す。しかも、帰って来たがんと同じ薬は通用しない。

無限の再生力を持つように見えるがんに、医療に携わる人々は懊悩する。がんを取り巻く人々の血を吐くような苦悩は、本を通じて、確かに私達にも伝わってくる。

病の皇帝。我々自身の歪んだバージョン。人の個性を殺すもの。様々に形容されるこの「がん」という病気は一体なんなのか。がんと闘う者は、絶えず問い続けながら絶望的な闘いを続けていく。何度打ち負かされても諦めない人間の不屈の精神は、まるで神話の英雄のように崇高だ。

そして現代。数えきれないほどの失敗と犠牲の果てに、ようやく一筋の光明が見えたところで、この本は終わる。だが、がんと闘う者はまだ終わってはいない。今後、誰でもこの闘いの当事者になる可能性はある。その時に、いささか誇りを持って闘える勇気を、この本は与えてくれる。